

教育長 様

校番 022 吉田 高等学校長
(全日制 課程)

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和5年度 実施報告書**

1 学校の教育目標等

- (1) 教育目標
探究型の学習を通じて、これからの社会で主体的・協働的に行動する人を育成する。
- (2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力
- ア 育てたい生徒像
自らの生き方や社会に関する課題について、解明する方法を探り出し、究め、これからの社会に貢献する生徒
- イ 育成を目指す資質・能力
- (ア) 課題を理解する力
(イ) 質の高い情報を集め、分析・整理する力
(ウ) 根拠をもって解決のための構想を立てる力
(エ) 考えた結論を他者に伝えることができる力
(オ) 課題解決を目指して主体的・協働的に真理の追究を継続する力
- (3) 学科等の特色
- ア 探究科
地域の様々な人を講師として招いて「地域人」としての生き方を学んだり、小学校・病院・福祉施設等で実習を重ねる中で人と触れ合う職業の価値観を学んだりすることを通して、探究に係る見方・考え方を働かせ、自己の在り方・生き方を考えながら、社会や地域の課題を発見し解決していく探究的な学習者「探究人」としての資質・能力を育成する学科である。
- イ アグリビジネス科
地域農業の発展に貢献できる資質や能力を身に付けた人材の育成を図るため、学科におけるマーケティング分野や商品開発分野に係る学習内容を充実させるとともに、学科で生産するぶどう等の農産物の特徴を生かした本校のオリジナル商品を検討・創出し、農業の6次産業化に関する学習を通して起業家精神の養成を図る学科である。

2 研究の概要

- (1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標
地域を支えていく人材の育成を図るため、本校が示す「探究課題を解決する取組を通して育成する具体的な資質・能力」の向上を図る地域協働教育カリキュラムを開発する。
具体的には
- ア 「まち」プログラム：集う場づくりから地域の活性化を図る。
イ 「ひと」プログラム：人と出会い学ぶ場づくりから人材育成を図る。

ウ 「しごと」プログラム：地域を興す場づくりから職業観の育成を図る。
という3つのプログラムに特化した学校設定科目において課題発見・解決学習を行うとともに、総合的な探究の時間「課題探究」においてそれらの成果を束ね、地域活性化のための新たなアイデアや持続可能な取組を創出する。また、これら一連の取組による生徒の資質・能力の向上を検証する。

(2) 1年後の目指す学校の姿

「探究的な学習」を総合的な探究の時間「課題探究」を中心に展開するとともに、地域とともに開発した「地域協働カリキュラム」を活用する。これにより、生徒一人一人が主体的に地域の課題発見・解決に取り組むとともに、多様な価値を認め、他者と協働して困難なことにも果敢に挑戦することが可能となり、地域に新たな価値を創造する力を育成することができる。

また教員も、探究型教育カリキュラムに誇りと自信をもち、生徒の資質・能力を開花させる探究学習を、総合的な探究の時間だけでなく、教科横断的な視点をもちながら、全ての教育活動において実践する。それらの学習成果をポートフォリオとして蓄積していくことで、生徒一人一人の「資質・能力」の変容を学校全体で分析・評価し、好循環のPDCAサイクルを生み出すことができている。

(3) 令和5年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・各小委員会（「産業社会と人間小委員会」及び「課題探究小委員会」）が定期的に開催され、学科経営計画の目標値を達成している。
- ・ルーブリックで設定されている資質・能力について生徒自身が議論し、より自分たちの目指す姿に近いイメージに基づいて表現することができる。

イ アウトカム（成果目標）

- ・ルーブリックによる「判断力」の評価結果がレベル3以上である生徒の割合が80%以上になっている。
- ・ルーブリックによる「探究力」の評価結果がレベル4以上である生徒の割合が30%以上になっている。
- ・授業評価アンケートにおいて、「主体的・対話的な学び」が身に付いていると自ら実感している生徒の割合が90%以上になっている。

(4) 令和5年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

総合的な探究の時間「みつや学」（1年次「産業社会と人間」2・3年次「課題探究」）

イ カリキュラム開発の概要

(ア) 1年次「産業社会と人間」

「探究的な学びの基礎づくり」をコンセプトに、大きく2期に分けて実施する。前半（4月～7月）は広島県教育委員会のプログラム「ライフプランナーとして人生設計を行う」に基づき、自分のこれまでの人生を振り返って「生きるって何？」というテーマで授業を展開して、2年次以降の選択科目受講に備えたキャリア学習を、後半（9月～3月）は探究的な学びの基礎的カリキュラムを展開する。特に後半においては進路希望別に「人間を学ぶグループ」と「地域を学ぶグループ」という2グループに分け、前者においては主に医療・教育・福祉に携わる地域人との交流、そして後者においては地域開発や農業、Iターン移住者との交流を経て、それぞれが「まち・ひと・しごと」の現状と課題を実践的に学ぶ。

(イ) 2・3年次「課題探究」

「医療」「教育」「伝統芸能」など、自らが選択したテーマについて、ゼミ形式で授業を展開し、決定した探究テーマに関する探究の実践を行うカリキュラムを構築する。1学期は、2・3年生合同で取り組む時間を設け、3年生が同じ探究分野に所属する2年生に対して、これまでの経験を生かし自身やグループに対して知識等の伝授を行い、2年生の課題探究に係る活動が円滑に進むようアドバイザー的役割を担うことで、協働的に学びを深めつつ、「まち・ひと・しごと」と自分の生き方を重ねて個人研究を突き詰めていく。

ウ 校内体制

カリキュラム開発を全教員が参画して行うために、担当者全員が参加する「産業社会と人間」小委員会及び「課題探究」小委員会を活性化させる。また、年間4回予定している「課題発見・解決プロジェクト研修会」において、授業担当者の率直な意見交換ができるような場を設け、吉田高等学校における「探究」のコンセプトを全体で共有して協働的な推進体制を構築する。

さらには各学年会より1名ずつ選出された教員で「探究科事務局」を構成し、探究科全体をマネジメントする。また、年間計画及び目標と照らし合わせた各カリキュラムの進捗状況を確認し、各小委員会においてそれぞれの科目に係るパフォーマンス課題やルーブリックの検証を行い、問題点・改善点の共有を図る。

(5) 学習評価

ア 知識及び技能

各教科で身に付けるべきとされている知識及び技能について、十分に習得しているかが評価の対象となる。

1問1答形式で測るような単純な知識だけではなく、他の教科の知識とも結び付けて活用できるような概念的な知識も重視する。

イ 思考力・判断力・表現力等

課題や問題に向き合って解決していく能力や、他者と協力して協働的に問題解決の糸口を見つけていく能力、自らの考えを表現していく能力など、課題解決の過程の中で必要とされる幅広い能力が評価対象になる。パフォーマンス課題やレポートなど、各教科の特性に合わせて評価方法を工夫し、「探究の日」や「学習成果発表会」など、発表や質問などの生徒のアウトプットの機会を設けて計画的に評価活動を行う。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で、自らの学習状況を把握し、試行錯誤しながら課題解決に向かおうとする姿勢を評価する。見た目の意欲だけにとらわれず、「みつや学」を通してどのような力が付き、どのような課題が見えたかを自己分析できる「振り返りシート」等を活用してきめ細やかに評価する。

(6) カリキュラム評価

蓄積されたポートフォリオを全教職員参加の研修会において検証し、「資質・能力」及びそれらを評価するルーブリック、さらには実施回数などを総合的に議論し、次年度への改善策を見いだすように取り組む。「産業社会と人間」や「課題探究」において計画的に実施したパフォーマンス課題やポートフォリオを組織的に評価し、生徒自身の「資質・能力」への意識及びその成長の実感を調査することで、その授業における目標を明確にし、より目標・授業・評価が一体化したカリキュラムに近づける。

3 令和5年度の成果及び課題

(1) 成果

今年度を実施した「学校生活アンケート」において、「探究的な学習の学習方法が身に付いた」と回答した割合が、1年生 85.5%、2年生 84.8%、3年生 93.9%と高い数値を示している。本校の探究的な学びがある程度定着し、生徒が主体的に学ぶことの意義を実感できていると考える。また、地域との協働によるカリキュラム開発の点においても、「中山間地域の次世代を担うリーダーの育成」事業におけるアンケート集約結果から、「地域に関する学習や体験活動を行うことで、地域のよさに気づくことができた」と回答した生徒が78.1%と高い数値を示しており、成果が形になっていると言える。

(2) 課題

ア 授業者のファシリテート能力の向上

探究的な学習を展開するにあたって、授業者側のファシリテーターとしての資質・能力をいかに向上させるかという点に課題がある。生徒の発言に対して、その後の展開に生かしていくことが出来ず、せっかくの生徒の意見が深まらないままに終わってしまうことが多い。これは総合的な探究の時間に限らず、すべての授業・教育活動に共通した本校の共通課題であり、生徒が、自分の思いをうまく言葉にできないとき、いかにしてその思いを汲み取り、サポートして円滑な討議を促進していくのか、そのファシリテート能力の向上に今後も尽力していきたい。

イ 資質・能力の評価

本年度は、本校のマスタールーブリックの中で、各教科がどの資質・能力を重視し、その実現に向けてどのような取組がなされているのかを中心に全体研修を行っている。例えば地歴・公民科では「論理構成力」を挙げ、「他者とつながりながら、世界が抱える課題や歴史的事象を自分事として捉える」ことを重視しており、外国語科では「表現力」を挙げ、「言語を活用して、必要な情報を抽出し、与えられた課題について自分の考えを伝え合うことができる」ことを重視しているなど、各教科それぞれの「身に付けさせたい力」が明確に示され、資質・能力についても議論が進んだ。しかし評価に関しては、「観点別評価」の導入後これまで以上に説明責任が伴うものとなり、評価規準としては明確になる一方で、先述した各教科の「身に付けさせたい力」を十分反

映したものになっておらず、ポートフォリオとして深い議論となりにくいものが増加している。「評価の客観性」と、深い学びにつながる「身に付けさせたい資質・能力」の議論をいかに両立させていくのか、今後の大きな課題である。

4 令和6年度の研究目標及び取組内容

(1) 令和6年度の研究目標

学校全体で育成する「資質・能力」についての議論を今後も継続し、深い学びにつながるポートフォリオの作成を通して、「探究人」としての到達段階を適切に評価できるようなカリキュラムを構築する。

ア アウトプット（活動指標）

- ・各小委員会（「産業社会と人間小委員会」及び「課題探究小委員会」）が定期的開催され、学校経営計画の目標値を達成している。
- ・ループリックで設定されている資質・能力について生徒自身が議論し、より自分たちの目指す姿に近いイメージに基づいて表現することができる。

イ アウトカム（成果目標）

各教科が設定した「生徒に身に付けさせたい力」がポートフォリオに反映され、それぞれが重視する資質・能力がループリックにおいて個別に明文化された上で、その評価結果がレベル3以上である生徒の割合が60%以上になっている。

(2) 令和6年度のカリキュラム改善の内容及び校内体制

ア カリキュラム改善の概要

(ア) 相互授業観察の充実

教師自身のファシリテート能力を向上させるため、相互授業観察を充実させる。具体的には、「授業者と生徒の対話」に主眼を置いて授業観察できるような工夫を行う。

(イ) ループリックの改善

各教科が設定した「生徒に身に付けさせたい力」をループリックの資質・能力に反映させる。これまでよりも生徒に求めるレベルが上がり、一時的に評価結果が下降することも考えられるが、なぜそのような評価になるのかを各教科で説明できるよう十分に議論する。

イ 校内体制

これまでこの「課題発見・解決推進プロジェクト」は、あえて明確に分掌内に位置付けをせず、プロジェクトリーダーを設定して「探究科事務局」という委員会体制で運用してきた。しかし指定事業が終了し、継続的に今後も探究的な学びの研究を推進するため、必要な人数の担当者を校務分掌に明確に位置付け、探究科・アグリビジネス科の学科の枠を越えて探究的な学びを推進する。